

教育講演

組織構築をフィードバックさせた細胞所見のとらえ方

埼玉医科大学病理学教室 ^{しみずみちお} 清水道生 (MD)

病理医による病理診断は、組織構築像（組織パターン）と細胞像に着目して行われているといっても過言ではない。一方、細胞診の診断では、やはり個々の細胞像をどうとらえるかが重要となることはいうまでもないが、組織構築をフィードバックさせることにより、細胞診の精度をあげることが可能である。通常、細胞診の標本を見ていく場合、まず、採取部位・方法、染色を確認し、標本の良否をみて、背景所見、採取細胞量、細胞の出現様式、細胞の結合性、ついで細胞の形・大きさ、さらに細胞質・核所見と弱拡大から強拡大へと移行していくことになる。本講演では、このうち特に「細胞の出現様式」に着目し、それに関連した組織構築をフィードバックさせた細胞の出現様式について話を進める。

細胞の出現様式とは、細胞配列や細胞集塊を意味するが、これには平面的なものと立体的なもの（いわゆる重積性を含む）があり、また、採取細胞量や細胞の結合性も大きく関与してくる。細胞配列の代表的なものとしては索状、シート状、インディアンファイル状配列などが、細胞集塊の代表としては乳頭状、濾胞状、まりも状集塊などがあげられる。細胞の出現様式を見る場合には、その基になった組織構築を思い浮かべ、組織構築像をどのような面で切ったものが細胞像として反映されているのかを考えることが大切である。本講演では、実際の腫瘍症例（捺印、圧挫、穿刺吸引などの細胞診）を用いて、この両者の関係を具体的に呈示する。